

2012 年度 システム理工学部語学部会

自己点検・評価報告書

2013 年 3 月 31 日

自己点検評価（システム理工学部語学部会）

目次

1. 理念・教育目標
2. 教育内容・方法・成果
3. 内部質保証

1. 理念・教育目標

<現状説明>

システム理工学部語学部会では、学生が語学教育において身につけるべき能力を理念・教育目標として整備している。それぞれの内容は以下の通りである。学部ホームページ、「学修の手引」等を利用して、これらの情報を学内外へ公開していると共に、ガイダンスや授業を通じて、学生に周知をしている。

●理念

教育は学生の自主性形成と、より公平な社会作りに重要な役割を担っており、我々教育者には、市民として学生が社会的、文化的、政治的に行動するためのビジョンを与える教育を提供する必要がある。我々が教育者、学生として必要なことは知識や真実の獲得だけでなく、善悪、不正や格差を克服する意思、社会現象に関連する幅広い視野を持つ、といった倫理感を持つことである。

語学部会の教育理念はしたがって、言語を習得することによって、日本だけでなく、世界における様々な社会問題を学生が自身の問題として捉え、多様な考え方を身につけ、不公平な社会構造を変える可能性を考え出し、そうした可能性を実現する力を学生に与えることである。

●教育目標

- ・英語・第二外国語を通じた学生のクリティカル・シンキング能力の開発
- ・英語・第二外国語を通じた学生の多文化理解の促進
- ・性、出自、宗教、民族等を根拠とした不当な差別の克服
- ・英語・第二外国語を通じたコンフリクト解決スキルの取得
- ・科学と技術、倫理の関係性の理解
- ・英語・第二外国語を通じ、多様な考え方を学生に伝える
- ・多様な社会問題を各授業で扱うことで、学生の多文化共生意識の向上促進
- ・ネイティブ教材を使用した英語・第二外国語のリーディングならびにライティング能力の向上
- ・英語・第二外国語によるディスカッション能力の向上ならびに学生の主体的参加の促進

<点検・評価>

教育理念は、「学修の手引」並びに学部ホームページに掲載し、毎年内容を見直して掲載を行っている。教育目標に準じたシラバスを各教員に作成してもらい、毎年最新の内容を学生に提示している。

<根拠資料>

(1-1) 語学部の理念・システム理工学部「学修の手引」

2. 教育内容・方法・成果

<現状説明>

システム理工学部語学部では、上記の教育理念を実施するために、様々な教育背景や教育アプローチを熟知した教員（専任・非常勤を含める総勢 24 名）を配し、効果的なカリキュラム展開を行っている。語学教育は英語教育と第二外国語教育を行っている。英語教育はディスカッションを中心として展開していることから、少人数教育が望ましいため、学生数 25 人以下で行うよう実施している。2008 年、2009 年の学部学科増設に伴い、適切に小人数教育が実施できるよう、非常勤講師数を増やした。第二外国語に関しても、かねてから学生より要望のあったスペイン語、フランス語を 2008 年に新設し、受講者の多い中国語の授業数を増やした。授業はシラバスにしたがって適切に行われている。

●教育内容

芝浦工業大学システム理工学部の卒業要件を満たすには、学生は英語単位を少なくとも 8 単位取得する必要がある。学生は、システム理工学部ならびに他学部の英語科目から履修科目を自由に選択できる（注：但し、他学部の英語授業は履修者数等の都合により履修が認められない場合がある）。1 年次前期のみ、履修クラスは事前に決定されるため、5 号館掲示板にて発表される配属クラスの掲示を確認することとなっており、こうした手順に関しては、入学時のガイダンスにおいて学生に周知している。1 年次後期以降は、事前履修登録（Web システム「S*gsot」で手続きする）において、履修したいクラスの希望を登録することができる。授業開始までには、配属クラスが発表されるので学生には各自、確認するよう周知している。

システム理工学部のイングリッシュ・コースはすべてコンテンツ・ベースドである。コンテンツ・ベースドの英語教育とは、教育理念を効果的に伝えるための教育メソッドである。英語に関しては、リスニング、ライティング、スピーキング、リーディングというすべてのスキルがばらばらではなく統一して教授され、授業を通じて、学生が英語能力に自信が持てるようになっている。こうした教育方法は、ホリスティック・アプローチとよばれる。学生は英語圏で実際に使用されている「本当」の英語教材を通じて学び、そうした教材は社会性があり、大学生にとって理解できるレベルの教材となっている。学生は知的刺激に満ち、内容の豊かな学習環境で英語能力を獲得できる。コンテンツ・ベースド・コースは、このように英語学習者用のテキスト学習、英訳練習、日常会話練習、読解テスト、といった従来の文法中心の英語教育とは趣を異にしている。

第二外国語・コースは、1 年次は語学の基礎を学び、2 年次は 1 年次で学んだ語学のさらなる発展ならびに、各言語の文化背景を学ぶ内容となっている。

●担当教員

専任教員は2名であり（両名とも英語担当）、語学部会の運営を行っている。英語カリキュラムの非常勤講師は14名おり、英語圏出身の教員だけでなく、ハンガリー、フィンランド、日本出身のバイリンガルの教員がおり多様な人材が揃っている。教員の教育背景は社会学、文化人類学、女性学、哲学、歴史等多彩であり、学生の多文化意識・クリティカル・シンキング向上を目的とする部会目標に適した人材が揃っている。第二外国語担当非常勤講師は7名おり、教える言語のネイティブか、ネイティブに近い日本人講師を配し、学生にとって初めての言語を教えるのに適した経験豊かな講師陣となっている。

●イングリッシュ・カリキュラム

- ・ 1年次 English Critical Thinking I（前期2単位） English Critical Thinking II（後期2単位）
 - ・ 2年次 English Social Issues English I（前期2単位） English Critical Thinking I（後期2単位）
English Critical Media Studies I（前期2単位）
 - ・ 3年次 English Critical Media Studies II（前期・2単位） English Analysis of New Social Movement（後期2単位）
- * 上記に加え、学外英語検定I・II（通年・各2単位）がある。
- * 学生は卒業までに英語科目を8単位（選択）を取得することが、卒業要件となっている。

●第二外国語・カリキュラム

第二外国語のカリキュラムには、中国語、韓国（朝鮮）語、スペイン語、ドイツ語、フランス語があり、ドイツ語以外は各言語ネイティブの教員を配している（ドイツ語担当教員もネイティブレベル）。第二外国語カリキュラムでは、1年次向けの各科目は、語学習得を主に目的とするが、2年次の各科目では、各言語の文化や歴史、社会等も学べるクラスを総合科目として提供しており、学生の言語ならびに国際社会理解の促進に貢献している。以下が第二外国語カリキュラムである：

- ・ 1年次：中国語I・II、韓国（朝鮮）語I・II、スペイン語I・II、ドイツ語I・II、フランス語I・II
- ・ 2年次：中国語圏の文化と歴史I・II、韓国（朝鮮）語圏の文化と歴史I・II、スペイン語中国語圏の文化と歴史I・II、ドイツ語中国語圏の文化と歴史I・II、フランス語中国語圏の文化と歴史I・II

* 学生は卒業までに第二外国語科目を2単位（選択）を取得することが、卒業要件となっている。

●教育成果

英語・第二外国語カリキュラムともに、学生の授業への満足度は高く、学生による授業評価アンケートでも満足度が高いことが実証されている。語学部会カリキュラムに対する学生の満足は、学生がそれまで知ることのなかった様々な社会問題を、授業を通じて学び、クラスメートや教員とディスカッションをすることでさらに理解が深まり、学生の視野が広がることから生じることが、学生評価アンケートのコメントから伺える。授業を通じて、社会に対する視野が広がるということは学部教育理念(<http://www.se.shibaura-it.ac.jp/dean.php>)、ならびに大学教育理念 (<http://www.shibaura>

itac.jp/about/president_message.htmlとも合致する。また、第二外国語に関しては、卒業要件単位が2単位にあるにもかかわらず、内容の豊かさから、2単位以上履修する学生が多い。このことから、教育内容の充実ぶりが伺える。

語学力の向上に関しても、学生から「ディスカッションを通じて、英語で話す自身がついてきた」、「第二外国語をネイティブに使ってみたら通じて嬉しかった」、といった肯定的な意見が同じく授業評価アンケートから伺える。多くの語学教員の授業評価アンケートの結果は高く、授業の質の高さが読み取れる。しかしながら、就職活動時及び大学院進学時等、TOEIC テストスコアの提出を要求される場面が増えているため、実用的な英語能力カリキュラムの必要性も学生から聞かれるようになってきている。

語学教育は現在、3年次までしか提供されていないため、4年次で空白が生じる。現在の英語カリキュラムが、学部3、4年生ならびに大学院生に十分に提供されていないため、就職や大学院進学時、進学後に役立つような語学カリキュラムへの期待値が増している。こうした背景から、2012年1月に学部長より、語学カリキュラムの強化の要請を受け、「語学教育に関する将来像検討委員会」

(以降、「委員会」と表記する)が語学部会教員を含む、本学部全学科から選ばれた5名の教員、計8名の構成により発足し、効果的かつ継続的に語学教育をどのように行っていくか現在、検討中である。語学部会と当委員会の話し合いにより、例えば、学部生向け英語による専門科目授業の展開、大学院進学予定の4年生への英語授業の提供、TOEIC テストの受験の制度化等を通じ、本学部学生の語学力が向上するよう、さらなる語学教育の強化・拡充が検討されている。

<点検・評価>

語学プログラムの拡充に伴い、非常勤講師の管理、カリキュラムの見直し、授業スケジュール等管理、入試等試験問題作成等の作業量が増加したこともあり、2012年度に専任教員を1名増やすよう要請し、2011年度に公募を行った。しかし、委員会での話し合いにより、求める人材像が、より実用的な語学カリキュラムの開発にシフトしたため、2012年度の採用は見送りとなった。2013年度採用に向けて、公募内容を変えて2012年度に公募したところ、応募人数が10名と少なく、現在再公募をかけている。

非常勤講師に関しては、過去定着率に問題があったが、やや落ち着く傾向となっている。非常勤講師は、外国人が多いため、ハッピーマンデーのシステムや、休講後の補講の実施、遅刻欠席の連絡等が十分でないことがあったため、こまめに専任教員が非常勤講師とコミュニケーションをとると同時に、書面での周知を徹底している。今後も非常勤講師の管理には注意を払っていく。

授業内容に関しては、英語・第二外国語カリキュラムともに、経験を積んだ各教員が、語学部会の理念を盛り込んだ内容を授業で実践している。教育内容は、国内外の社会問題を中心とし、言語能力の向上とともに、クリティカル・シンキングの開発も試みており、学生にとって単なる語学習得を超えた、ホリスティックな語学授業となっていると評価できる。但し、上記したように、理工系の学生のニーズに合った語学教育、特に英語能力の強化、TOEIC の導入等、今後どのように語学カリキュラ

ムを見直していくのか、今後の課題となっており、委員会は 2015 年から新語学カリキュラムの実施を目指しているため、今後さらなる検討が必要である。

<根拠資料>

- (2-1) 卒業の要件について・システム理工学部「学修の手引」
- (2-2) 非常勤講師向け遅刻欠席時の連絡先周知文書

3. 内部質保証

<現状説明>

語学部会では、教育の質保証のための制度を構築し、より学習効果の高い制度にするため、定期的に制度の見直しを行っている。特に 2011 年度末からの委員会発足により、見直しが進んでいる。また、非常勤講師が多いことから、教育制度の周知を非常勤講師と共有し、学生にとってより満足度の高い語学プログラム運営を実施している。

●教育制度

語学部会では、部会の理念・教育目標を実現するために、以下の制度を整備している：

- ・英語のクラスに関しては、効果的に英語能力を向上し、コンテンツ・ベースト授業を展開するために、25 人以下のクラス編成を実施している。1 クラスにおける人数を 25 人以下に制限しているのは、授業がディスカッションを中心とし、学生と教員、並びに学生間のコミュニケーションを円滑に図るためである。教員に関しては、英語で国内外の社会問題を授業で教授できる教員の配置を行っている。
- ・第二外国語のクラスに関しては、ドイツ語以外は各言語ネイティブの教員を配している（ドイツ語担当教員もネイティブレベル）。システム理工学部がシステム工学部から、システム理工学部になるに当たり、学科が増設され、学生数が増えた際には、学生の要望にこたえる形で第二外国語科目を増やした。授業内容は、語学だけでなく、各言語の文化についても教授しており、語学の背景も学べる制度となっている。

●部会活動の公表

語学部会では、活動内容の現況を、各教員がシラバスに毎年掲載し、学内外に公表を行っている。

<点検・評価>

2011 年度芝浦工業大学システム理工学部語学部会 (自己点検・評価報告書)や、本報告書の作成を通じ、部会活動の自己点検・評価を行っている。

<根拠資料>

- (3-1) 2011 年度芝浦工業大学システム理工学部語学部会(自己点検・評価報告書)